

令和 7 年度 2 学期終業式式辞（全日制）

皆さん、おはようございます。本日、2 学期の終業式を迎えることができました。まずは、日々の学びや課題研究に真摯に取り組んできた皆さんの努力に、心から敬意を表します。

今年、本校は創立 130 周年という節目の年を迎えました。明治の創立以来、幾多の時代を越え、地域とともに歩みながら、学びの灯を守り続けてきた歴史と伝統があります。その重みを胸に、私たちは今、未来を見据えた新たな探究に挑んでいます。「なぜ」を深める科学的思考文化の進化をテーマとする SSH 活動において、私たちが大切にしている「問い合わせを立て、仮説を構築し、検証を重ねる」という営みは、まさに科学の本質であり、未来を切り拓く力だと私は考えています。

ところで、私には小学一年生の孫がいます。その孫が、ある日こんな質問をしてきました。「くまさんは、なぜニュースでは『クマ』とカタカナで書いてあるの？」私は優しく丁寧に回答しました。カタカナを習ったばかりの孫は、きっと童話で出てくる優しい「くまさん」とは異なる「クマ」というカタカナ表記が気になったのに違いありません。今年は、小学 1 年生にまで「クマ」のニュースを意識させるほど、出会えば命に関わらかねないクマが人里に現れる緊張した日々が続き、北国の人々の生活を一変させる厳しい一年となりました。また、えさ不足のためか、クマが冬眠せず越冬するかもしれないという話もあり、これからも安心できない日々が続きます。

今世紀の生物学に残された未開拓分野は、冬眠のメカニズムだと言われています。人間とクマの脈拍数はほぼ同じですが、冬眠中のクマの心拍数は毎分 10 回ほどに下がります。これは、人間であれば、血栓ができて脳卒中などを引き起こしかねない危険な状態です。ところがクマは、冬眠中に血小板の数が減少し、血液が固まりにくくなるのです。ある科学雑誌では、クマの冬眠の「超能力」が紹介されていました。冬眠中、寝たきりでも落ちない筋肉や、脂肪をため込みながらメタボ症状を防げるというクマの恐るべき能力。医療や宇宙旅行の分野でも、クマのこの「超能力」を応用できれば、大きな革新をもたらす可能性があるというのです。

12 月 7 日は、二十四節気の大雪であり、さらに季節を細かく分けた七十二候の 12 月 15 日頃は、「熊蟄穴」（くまあなにこもる）でした。その名の通りに、クマにものんびり冬の眠りについてほしいのですが、なお被害のニュースが飛び交うのはどうしたことでしょう。眠らないクマが近年目立つとの心配な話も聞きます。事態を開拓しようにも、地方だけの予算では十分な対策を講じることは困難であり、国の主導による被害対策が必要だと私は考えます。

「月光の分厚きを着て熊眠る」は、俳人・高野ムツオの俳句です。人にとって神秘的な存在であった「クマ」が、ただの一害獸になってしまうのは、あまりにも哀しく惜しいことだと思いませんか。

さて、今年の秋、私は二つの知的探究活動に感銘を受けました。

一つ目は、ゲームクリエイターの堀井雄二さんが、文化功労者として旭日小綬章を受章したことです。堀井さんは「ドラゴンクエスト」を通じて、物語と探究の力を世に示してきました。彼の作品は、単なる娯楽を超えて、人々に「なぜ？」と問いかける力を持っています。堀井さんは「人生はロールプレイングです。」と語っています。これは、私たちの SSH 活動にも通じる言葉です。人生は、自ら問い合わせを立て、仲間と協力し、試行錯誤を重ねながら、自分だけの物語を紡いでいくものです。

二つ目は、イグノーベル賞で、日本の研究グループが生物学賞を受賞したことです。農研機構のチームは、牛にシマウマのような縞模様を描くと、牛にハエなどの吸血昆虫がとまる数が約半分に減ることを、突き止

めたのです。「家畜を守る」というしっかりととした実用性を持ちながら、牛を馬にするという「人を笑わせ、そして考えさせる」科学の力を世界に示しました。堀井さんの創造力、イグノーベル賞を受賞した農研機構のチームの探究心は、そのどちらも「問い合わせる力」が原動力となっています。皆さんのが課題研究で取り組んでいる「なぜ」を深める営みは、この両者に通じる非常に知的な営みなのです。

3学期には、研究のまとめや発表、進路選択など、さらに自分自身と向き合う機会が増えていきます。どうか、堀井さんのような「好奇心と挑戦心」を胸に、そしてイグノーベル賞に象徴される「ユーモアと柔軟な発想」をスペースに、自分たちならではの探究を、さらに深めていってください。

本校の130年の歴史と伝統を受け継ぎながら、皆さん一人ひとりの問い合わせが、日本、そして世界の科学文化の発展につながることを信じて、私の式辞といたします。